

福島の子どもたちと教育現場の今

「差別や偏見から負けない強い心を育てるために」

武^{たけ}
田^だ
秀^{しゅう}
司^じ



プロフィール

福島県福島市出身。福島県福島市立平野中学校教諭。2011年8月より、県外に避難した小・中学生の支援のため、新潟県へ派遣。（当時、生後3か月の子どもと妻とともに避難）2013年福島に戻り、一年間育児休暇を取得。その間「パパカフェ」を立ち上げる。

○司会 ただいまより二〇一九年度講座「生きること」の第一回目を開催いたします。

本日はお忙しい中、ご参加いただきましてまことにありがとうございます。

それでは、本日もお招きしました講師、武田秀司さんのプロフィールをご紹介します。武田秀司さんは、福島県福島市出身です。二〇一一年八月より、東日本大震災によって県外に避難した小・中学生の支援のために新潟県へ派遣されました。当時は生後三か月のお子様と配偶者ともに避難されていました。二〇一三年に福島に戻り、一年間育児休暇を取得され、その間に「パパカフェ」を立ち上げられました。

それでは、武田秀司さんをお迎えしたいと思います。皆様、拍手でお迎えください。

(拍手)

○武田秀司 初めまして、武田秀司と申します。今日はよろしく申し上げます。

座ってお話しさせていただきます。ちよつとなまっていますので、聞き取りにくい点はご了承ください。山形弁と福島弁がミックスしたちよつと複雑なイントネーションも出てきますが、よろしく申し上げます。

まず、この講座のお話をいただいたときに、お聞きに来る方は何を知りたいのかなど、私のプロフィールとかを知って、ということなどいろいろ考えてきたんです。ただ枚方市のこの講座の趣旨が、とにかく生きることはということ、いろいろな経験をした方の話を聞いて、これから生きていく上での参考になればということでした。なので私も自分の経験、記憶を一人称でこ

れからお話しします。いろいろご意見やご批判や、それはちょっと違うんじゃないかという点もあると思いますが、まず聞いていただいて、後で、私も実は皆さんにお聞きしたいこともあります。ここ数年はずっと福島にいますので、ちょっと見えなくなっている部分や麻痺しているところもあるかと思いますが、ぜひ私も今日勉強していきたいと思います。よろしく願います。

ちよつと堅苦しいタイトルをつけさせていただきましたが、今、福島市立平野中学校というところに勤めています。平野は普通の平野と書きます。本当に坂のない平らなところなんです。飯坂温泉というのはお聞きしたこと、もしかすると行ったことある方もいらっしやるかと思いますが、その飯坂温泉のある、福島市飯坂町平野というところです。なので、学区内ではありませんが、飯坂温泉がすぐ近くににあります。他に有名なところといえば医王寺というお寺があり、松尾芭蕉が訪れたというゆかりの地で、佐藤兄弟という源義経の家来のお墓があったりとか、この話は長くなりますのでやめますが、そういう場所です。周りは果樹園が多く、サクランボ、桃、梨、リンゴが豊富で、子どもたちも家が果樹農家の割合が多い学校です。全校生は二四〇人と小さい学校ですが、素直で明るく、純朴といってもいいぐらいの子どもたちです。今日は、「おいしいタコ焼きがお好み焼きを食べに行くから明日は休みます」と言ってきたので、きょとんとして、ただ笑って話を聞いていました。でも、ちゃんどというところで大阪に行くのかっていうことを、自分のクラスにはきちんと言話をしてきました。今、中学一年生ですが、何をしているのって顔を見ましたが、帰ったらまたゆっくり話をしたいと思います。

それでは、「福島の子どもたちと教育現場の今」ということですが、後でご覧いただきますが、二年前にNHKの「おはよう日本」で道徳の授業、福島の差別、偏見をテーマにした教材を基に授業を行いました。福島県産の桃について、当初、本当に果樹農家が多い学校でこの話をしていいのかなと私も思いましたが、取材が入るとなるとまた別かなということ、保護者には承諾していただいたんです。すごくデリケートな話になるということで、NHKの方にも全面的に協力していただいてニュースは流れました。実は、新潟に約二年間いたときの話を本当はたくさんしていましたが、放送を見たら全部カットされていて、新潟で嫌な経験をして帰ってきたっていうところだけ、すごくクローズアップされていました。新潟の方には申し訳ないという気持ちが大きかったんですが、それも少しずつ話をしていきたいと思えます。

サブタイトルに「差別や偏見から負けない強い心を育てるために」とつけさせてもらいましたが、これは気にしない、差別されたり偏見を受けても負けないで向かっていっていい、そういう単純な言葉ではありません。なぜ偏見や差別が生まれるのか、なぜそういうひどいことを言われたり、扱いを受けたりするのか、相手の立場になって考えるぐらい強い広い優しい心を持ってほしいなっていう願いが込められています。自分の考えを押し通す、信念を突き通すでは、やっぱりこれからは強い人、強い心とは言えないんじゃないかなということ、子どもたちには日ごろからなるべく、ただ単に繊細じゃなく図太いっていうだけじゃなく、繊細でありながら、よりしなやかに強くたくましい子ども、大人になってほしいということ、現場では頑張っているつ

もります。

何回もお聞きしている話だと思いますが、東日本大震災当日の三月一日は卒業式でした。福島県内のほとんどの公立中学校で卒業式が終わってほっと一息、不登校の生徒も後から来て卒業証書を渡して、職員室でみんな、今日の卒業式は良かったねと、ちょっと和やかな雰囲気のところろに大きな揺れが来しました。当時は福島市の東隣の伊達市の中学校に勤めておりまして、二階に職員室があったのですが、揺れが始まってすぐ、これは床が抜け落ちて下に落ちるなどいう感覚でした。これは下に落ちるので、どうすればダメージが少ないかなってということが頭をよぎったのを覚えてます。その後は、もう必死に先生方で、倒れないように、崩れないように押さえている姿が、今もはっきりと脳裏に焼きついています。

少し揺れが収まったところで外に出て、状況を確認しました。その後も余震はずっと続いたので、本当にコンクリートって波打つんだなっていうのが、初めてわかりました。もちろん電話も電気もつながりませんし、生徒に安否の確認もできないので、とりあえずその日は一旦自宅に帰りました。もちろん大渋滞で、通常、通勤時間は大体三〇分ぐらいなんですけど、この日は三、四時間ぐらいかかったと思います。車の中のテレビで宮城、岩手の強烈な津波の映像を見て、衝撃を受けていたこともはっきりと覚えています。皆さんも見たと思いますが、特に名取市の車が巻き込まれたり、波が川のように田んぼをずっと流れてくる映像は強烈でした。

ようやく家に着いたのですが、そのとき妻がまだ妊娠八か月でしたので、そのことで私はもち

ろん頭がいつぱいでした。一応無事で、家も大きな損害もなく、停電と水道が止まるという程度で収まったのですが、余震がずっと続く中、一夜を明かしました。次の日から行ける範囲で学校に集まってくれということでした。私も久しぶりに当時の写真を見ましたが、この爆発する瞬間を職員室のテレビで見て、もう福島は終わったなと思ったのが実感ですね。これはもうここには住めないな、間もなく避難しなければならぬことになるなと思いました。

ちよつと話がそれますが、私たち夫婦はなかなか子どもができなくて、結婚一四年目にしてようやく授かったと思いましたが、死産でした。不妊治療もものすごく時間がかかって、妻のほうは何十倍も大変な思いをしていましたが、妊娠八か月のときに、病氣だと診断が出て、生まれてきてもすぐ亡くなると思うし、妊婦のリスクも高まるということだったので、九か月目に、実際は中絶なんですけど、死産扱いにしていたら、きれいな顔のままという経験をしましたので、二〇一一年はそのときのショックを引きずっていました。やっぱり女性は強いなと思いましたが、もう一度同じことになる確率が高いですと医者にも言われましたが、妻は、まだ卵子が残っていたので、もう一度チャレンジしたいと言いました。私は、こういう思いをもう一度すると、精神的にも二人とも耐えられないんじゃないかと思って二の足を踏みましたが、やっぱり女性は強いなということ、チャレンジすることにしました。まだ生まれていませんでしたが、そんな最後の望みを託してできた子どもがお腹にいたものですから、本当に神様は何でこういろいろな試練を続けるのかなっていうことを、正直、地震のときに思いました。子どもの顔を見ること

ができないのなあっていう別な不安も込み上げてきました。そして、五月に無事生まれまして、ものすごく心配して分娩室で待っていました。毛むくじやらの、何か出てきてやったぞっていうくらいふてぶてしい姿で、四二〇〇グラムの大きな赤ちゃんが、傾きかけたひびだらけの病院で生まれました。そのときは避難するとか、そんなことも頭に全くありませんでした。

六月に入って校長先生に呼ばれて、震災で県外に避難した子どもが、小・中学生、高校生も含めてたくさんいるんだと聞きました。もちろん知ってはいましたが、とても県外に避難した子どもたちのことを考える余裕は全くなくて、日々の学校、本当に今思い返しても三月、四月、五月、どう過ごしていたのか、ちょっと思い出せません。手帳を見ると、いろいろなことがあったと思います。本当に記憶が抜けています。三月、四月は自転車で行ったのをかすかに覚えていくぐらいです。

そのような状況の中、他にも支援が必要だということで、校長先生に呼ばれました。県教委の派遣先は東京かもしれないし、埼玉かもしれないし、山形、宮城、新潟かもしれないという話がありました。当時三年生の担任で、生活担当生徒指導主事でしたので、とてもそんな途中で、八月からは行けないということでお断りしましたが、三日後にまた同じ話がありました。ある程度中堅どころで、受験の指導もあり、いわき市で浜通りの学校を経験していましたので、いわゆる浜通りの浪江、大熊、富岡、双葉もある程度知っていましたので、私に白羽の矢が立ったのだと思います。希望者がいなかったということだと思えますが、もう一度考えてくれ、生まれたばかり

りの子どももいるから何なら家族一緒ということでも話がありました。すごく悩みました。三日で結論を出してくれと言われたので、すごく目まぐるしくいろいろなことを考えて決めましたが、すごく悩みました。今もそうですが、当時、バスケットボール部の顧問でした。こう見えて部活ばかりで、どのようにすれば県大会で優勝できるかっていうことが頭の八〇%を占めているような、体育教師じゃないですが、そういう教師でした。県大会が目の前だったこともありましたが、すごく悩んだのを覚えています。悩んだ結果、私は行くと返事をしました。

行き先は新潟県の刈羽中学校というところでした。新潟県は非常に長い県ですので、大きく三つに分かれていて、北側を下越、真ん中を中越、南側を上越といいます。中越地域の田中角栄氏の地元である柏崎市に住みまして、刈羽中学校に派遣されて勤務しました。刈羽中学校は、全校生徒一〇〇人ぐらいの小さな中学校で、福島県でいうと大熊中学校、大熊町は今も避難区域ですが、そことすごくそっくりで、何がそっくりかといえば施設ですね。冷暖房完備は当たり前で、ウォッシュレットトイレ、ナイター付の広い野球のグラウンドとタータンのゴムの陸上競技場と同じトラックがあつて、体育館が二つありました。もう何かから今まで行き届いていた設備の中学校です。大熊中学校も同じような感じでしたが、原発で潤っていたおかげということ。刈羽中学校に三〇人ぐらい避難してまして、隣の刈羽小学校には五〇人ぐらい避難してました。避難地域はいろいろでした。双葉町、富岡町、浪江町、あと自主避難の方もいらして、さまざまな地域の福島県内の方が避難をしていました。もちろん東京電力の関係で、お父さんが福島原発に

勤めていて、そのまま柏崎刈羽原発勤めになったというパターンも多かったです。

まず、ここで私は何をすればいいのかと考えて、とにかく福島から避難してきた子どもたちと話をしようと思いました。今どういう状況なのか、どういう気持ちなのか。避難して、五か月が経過していましたので、もう福島に戻っていた子もいましたし、ほとんどは落ちついていたんですが、まずはカウンセラー的な形で一人一人話を聞いて、あと保護者も希望者は学校に来ていただいて話をする日々が続きました。だんだんと隣の三条市、長岡市、見附市、それと周辺の市町村にも出向くようになりまして、気がつくともスクールカウンセラーのようなことをするようになっていました。あまり浸透していかないかもしれませんが、正確にはスクールソーシャルワーカーという職があるのです。そのスクールソーシャルワーカー的な業務をするようになっていました。毎日ふさぎ込んでいる、鬱に近い状態になっているお母さん、保護者の話を毎日聞いているうちに、私は臨床心理の免許を持っているわけでもないのに、普通の一教員としては恐らくキャパシティを超えてしまい、症状がうつってしまったのです。何の知識もなく、毎日一時間、二時間のべつ一〇〇人以上の方々の話を聞いたわけですから、当然そうなってしまう、不眠症に陥りました。

これはだめだということで、同じく新潟県に派遣されていた小学校の先生とチームを組んで、小学生はその先生に任せて、中学生は私が担当して、制限時間も設けることにしました。絶対一時間以上はお母さんの話を聞かないと。もちろん新潟県の教育委員会と柏崎市、あと刈羽村の教

育委員会のいろいろな先生のお世話になり進めていきましたが、毎日何人以上は話を聞かないというふうにならずルールを決めていきました。その中で、今までは本当に子どものことを知ろうとしていなかったっていうことを痛感しました。震災前まで、子どものことを知るために質問をして、今、何を考えているのか、どういう気持ちなのか、どういう状況なのかということ、本当に聞いていなかったなど、ものすごく反省させられました。

いろいろなアンケートをしてもらったり、いろいろなことをお話しましたが、こちらがびっくりするぐらい福島に戻りたいということが書かれていました。集計すると、約六〇%の子が、今望むことはとか、今したいことはとかという質問に、記述式で福島に戻りたいと書いていました。小学一年生から中学三年生までが多かったです。これも共通していたことですが、それは新潟の先生には言えないということでした。どうしてか聞くと、お世話になってきたから。小学二年生がそう思っているのだと思つて衝撃を受けました。今の学校が不満ではないし、友達もできたり、先生も優しいし、いっぱい支援してもらっているから、福島に戻りたいとは言えないということでした。それでは、なぜ今言ったのか聞いたら、「先生は福島の人でしょ」という答えが返ってきました。アンケート結果も、学校は今のところがいいけど家のベッドで眠りたい、福島のお布団で寝たいという小学生がすごく多かったです。特に不登校になったり、何か健康上の問題があったりという子どもではなく、本当に明るく学級に溶け込んでいて、何も問題がないような子どもでも、そういうことを書いてくるっていうことは、やっぱり本当に大きなことを乗り越えて、

今、新潟の学校で頑張っているんだなということをしごく感じました。

このような話を新潟の先生にも聞いていただいて、聞くだけでは物足りないということで、今度には新潟にしながら、今の福島の学校はどうなっているのかということ、定期的に避難している学校、大熊町、浪江町、双葉町、富岡町の現在の小・中学校を福島に戻って見て回りました。津波で校舎がもう使えなくなっている学校、プレハブの学校、いろいろな学校を回りましたが、その現状を保護者に伝える、子どもに伝えることも行いました。それが避難の現状です。

いわゆるいじめや不登校の問題ももちろんありました。いじめに限らず、何げない言葉、例えば福島から避難してきた子が、ちょっとけんかになったんですね、友達と。その子どもどうしてそういうことを言ってしまったのかは覚えていないのですが、新潟の子に「おまえなんか生まれてこなきゃ良かった」って言ってしまったんですね。そうしたら、新潟の子が「おまえも生まれてくるのが遅かったら奇形児で生まれてきたんだぞ」って言い返したんですね。新潟の子は、自分でそんな言葉が出てきたことにびっくりして泣きじゃくっていました。私もそれを聞いたときにすごく複雑な気持ちになって、どのように声をかければいいのか、すごく戸惑いました。やっぱりその子も、家では福島の話や原発事故についてのことは話ができないと。福島のことを話すと、お母さんの機嫌が悪くなると。だから、福島の話は家で一切話をしないと。福島のことを話した。なので、このこともお母さんに言わないでねと書いていました。

大人の事情と子どもの関係というものも、なかなかのずれがありまして、大人も本当に自分の

生活や仕事のこと、精一杯で、子どもたちが今どう考えているのか、新潟にどういう形で住んでいるのか、いつ戻るのか、進学、就職をどうするのか、ということ、をゆっくり話し合っていないし、話し合う余裕もないのです。時間だけが過ぎていくことで、私はできるだけ、お子さんは、本当はお母さん、お父さんに話したいことも遠慮したり、新潟の先生にも遠慮したりしているんですよ、ということをお便りやお会いしたときに話をしていましたが、なかなか届けるのが本当に難しいというのが現状でした。今お話したのが二年目に入っている状況です。

私も不眠症になったときに、支援する支援団体のチームの中には必ずいろいろな、教育関係だけじゃなく医療関係の支援団体、福祉センターの方、いろいろな方がチームになって子どもたちのことをバックアップしていったんですが、その中の先生に相談したんですね。ちょっと寝れないんです、寝ても毎日二時に目が覚めてそこから寝れないんです、という話をしました。それなら、話を真面目に聞き過ぎだよ、あんた、無理だよと、何にもあんたはできないんだから、聞くだけでいいよと、「それは大変ですね」、それだけでいいよと、何にもできないんだから、そこにいて、前にいて話が終わるまで我慢しているだけいいんだよと、本気になって聞いてくださったよと言われました。ということは、私の話も本気で聞いてないんだなと思いつつ聞いていましたけど、そこからちょっと楽になりました。聞くことは聞く、でもできることは限られているので聞くだけにするっていうことを、それは今でも心がけています。新潟の話ももっとしたいんですが、先へ進みます。後でもし聞きたいことあればお願いします。

その後、二〇一三年の三月まで先ほどの刈羽中学校のほうで勤務し、ご好意で週に一時間だけは一クラス授業をさせてもらったんですよ。多分ずっとそういうことをやっているとおかしくなるだろうから。まあ、おかしくなったんですけど。社会科の授業もさせてもらったんですよ。すごく楽しかったです。こんなに授業ができるのはありがたいことだったというのがわかりました。やっぱり子どもはどこも同じで、本当に素直でかわいいなと思いました。

そして、なぜ育児休業とると考えたのかというと、今やっていることとつながるんですが、向こうでいろいろな支援活動をしていく中で、いろいろな地域の交流会やイベントに行くと、大抵顔ぶれが一緒になるんですね。新潟県庁でお会いして、またどっかの講演会や市役所でお会いすると、だんだん顔見知りになって、もちろん福島の方とも知り合いになって、関西の方、阪神・淡路大震災を機に立ち上げたいろいろな団体の方とも知り合いになりました。その中で、震災があるたびに思うのは、最後はやっぱり弱者に、子どもや女性や高齢者にしわ寄せが行くんだと。なぜ阪神・淡路大震災から学ばなかったのかっていう話題が必ず出ました。神戸の方も新潟の支援をされてたんですが、やっぱりなぜ新潟の人たちが立ち上がらないのかとおっしゃっていました。地元の人間よりも外の人間が心配するパターンがすごく多いみたいで、そのときもそういう話が出ました。

自主避難の方も多くて、福島や郡山市からも母子避難、お父さんは福島に置いて、週末だけお父さんが新潟に来るっていうご家庭もたくさんありました。お母さん方はコミュニティーをつく

って集まって共有できるんですけども、男は本当に孤立していて、家族のために往復するんですけど、だんだん二年目、三年目になりまして、福島に残っているお父さんが病気で亡くなった、移動途中の交通事故で亡くなったり、あともちろん離婚もありました。男のほう弱いはずなのに男に対する支援がないというのは、母子避難の支援ということで、話題には上がっていません。私もお母さん方の話をいっぱい聞いたんですが、子どもの心配で相談に来られるんですけど、最後は嫁姑か夫の愚痴の話になっていました。そういう話を聞くと、本当に男ってだめだなと、一大事があったときにプライドを捨てて、なりふり構わず家族を守るということが難しいんだなっていうのを痛感しました。

そして二〇一二年の一月二月ですね。福島教育委員会から来年どうするんだと話があって、福島に戻りますって返事をしたんです。その後に気持ちが変わって、一年間育児休業をとりたいたいという話をしました。妻が小学校の教員をしているっていうことが大きくて、妻の早く現場に戻りたいという願いがきっかけでした。私は三歳になるまでは育児休業をとってほしいなと思ってたのですが、まあ四月から二人で復帰すればいいかなと思ってたんです。ただ、ああ、そうか、私がつるっていう選択があるんだなというふうに思いました、いろいろな人にも相談して、反対もされたんですが、育児休業をとりました。

二〇一三年四月一日から育児休業をスタートしました。三人も四人も子育てされた方には、一人ぐらいで何甘いこと言っているのって怒られそうですが、本当に私にとって育児は修行でした。

朝、妻を見送って、その後、息子が三〇分泣きやまず、何でおまえと二人つきりにならなきやいけななんだっていう時間を過ごしました。最初の二週間で三キロぐらい痩せましたね。あかぎれっていうのはこういうことなんだっていうのもわかりました。食事の準備、明日の献立を考える、何から何まで、本当に何にもしてこなかったんだっていうのを痛感しました。自分は三割ぐらい家事を分担していたと勘違いしていましたが、一割ぐらいしかやってなかったということがはつきりとわかりました。私は、月曜日は何、火曜日は何、水曜日は何というふうには、仕事のようにマニュアル化することにしました。これはちょっともたないなと思って、月曜日は親子体操教室、火曜日はどこ、水曜日はプールに、木曜日はどこ、金曜日はどこって決めて、メニューも、妻には申し訳なかったんですが、もうちょっと多かったです、ほぼ五種類の献立をサイクルにしました。余裕が出てから変えようと思ってやりました。

話があちこち飛ぶのですが、子育て支援がすごく福島市は遅れていて、充実していないんです。枚方市さんの広報紙を見せてもらったんですけど、多分当たり前だと思っていらっしゃると思いますが、子育て支援など、いろいろな活動が福島市はまだまだ少ないです。五、六年前よりはいいと思うんですけど、親子教室、放射線の不安の中、外遊びさせられないのになぜもっと公園や室内の遊び場の整備を急がないのかという声があつて、ようやく動き出したんです。二〇一三年に福島へ戻って、全然進んでいないじゃないかよっていう感じだったんです。

育児に関心の高いお母さん方が、室内のダンス教室に集まっていて、毎週月曜日にお休みのパ

パが来ているってことでだんだん話しかけてもらえるようになりました。実は三月まで新潟に避難していましたが話をしたら、実は私は秋田にか、私は埼玉にと、大多数ではないですが結構な割合で避難して戻ってきた方がいらして、まだ外遊びが不安なのでこれに登録したんだ、連れてきたんだっていう方がいらっしました。そうしているうちに、もうその親子体操教室は終わっちゃったんですけど、続けてほしいっていう声があったので、そのダンスの先生に頼んで延長してもらって「わくわくキッズサークル」というのを作りました。一応お金も取って、結局五〇人ぐらい集まったんですけど、その代表をやっていました。

その中でもやっぱり本音が言えないですね。バッグに線量計は持っているんだけど、大っぴらに量って歩いていません。私もお隣の山形県の米沢市にまで車で一時間かけて公園に行っていました。福島ナンバーがいっぱい停まっているんです。多分福島の人間にしかわからないと思うのですが、線量を量るとそんなに大した差がないのですが、〇・一、〇・二の違いが、すごく大きくて、今はもう全然気にしてないんですけれど、当時は本当に本心に過敏でしたね。福島に戻ってきて、子どもが外から帰ってくると、全部服を脱がせて洗濯しました。自分でも思い出すとびっくりなんですけど、そこまですていました。自分は飲んでいましたけど、水道水ももちろん飲ませてなかったです。米をとぐのはさすがに水道水で洗って、炊くときはミネラルウォーターです。本当にばかじゃないのって思われるかもしれないんですけど、でも、私だけじゃありませんでした。ただ、そういう話ができないんです。皆さん本当の友達や親兄弟にはこういう話

題はしてたと思うんですけど、近所や同僚にはできなかつたですね。まだそんなことやってんのって言われるのが怖いんですね。そんなこと言ったら福島で生きていけないよ、子育てできないよって言われるのがわかってるからです。本当に過敏だったと思います。約一年続いたと思います。なので、育児休業中は県外の公園に、室内遊びはそういった安全な場所へ行っていました。当時砂遊び、土いじりをしないことが子どもに悪影響を与えるっていうことがすごく話題になりました。ようやく福島市の室内の遊び場で砂場遊びをできる場所ができたのが、この二〇一三年でした。ようやくそういう設備がスタートしたんです。

(スライド写真を見ながら)

これが、今言った親子体操教室の体育館での様子です。このときはまだ一歳一〇か月ぐらい。本当は二歳からなんですけど、無理やり入れてもらって、やらせてもらいました。これが福島駅のところで、これはもう二歳になってます。仙台に、違いますね、子どもなら誰でもですけど、新幹線を見に行っただけですね。これ何を食べているんですかね、お好み焼きじゃないと思うんですけど：フレンチトーストですね。初めて挑戦しました。一応食べてくれたんですけど、朝の様子です。これは何って、みかんですかね、はい。

二〇一三年八月ようやく三か月たってちよつと余裕ができた頃、どうやらママカフェっていうのがあるらしいと知りました。福島から帰ってきたお母さん方、まだ不安で、私と同じように外遊びだめ、水道水もだめ、でも誰に相談すればいいのっていう方どうぞっていう会です。私も

連れていきました。もちろん男は私だけです。後から紹介しますが、避難中のお母さんもたまに里帰りで来てたりということ、その方と、さっきのお父さんの話になったんですね。やっぱり話題になったのが、福島に置いてきたお父さんです。戻ってきた方は今、お父さんと家族で一緒にまた生活できて良かったという話題なんですけど、でも、あの二年間どうしてたんだらうね、パパねとか、言いたいこともあったけど言えなかったんだらうねとか、今どう思っているのかなとか、あのときどうだったのかなっていうのもよく話題になったのですね。避難したことがあって、向こうで子どもたちの支援をしていて、戻ってきてこういうこともやっている私みたいなやつはいないので、私の話も聞きたいということで、向こうで何回か、新潟の実情と福島の現状とか、話をしました。あともちろん、また新潟に行つて今の福島こうなってますとか、山形に行つて福島市や福島県は、今、学校はこういう状況ですというふうには、来年戻らうかなとか、あと二年後に戻らうかなとか、子どもが中学生に上がるときに帰らうかなと思っている人たちに話をしてほしいということで、こういう場に呼ばれたり、話をしに行つたことも何回かあります。

二〇一三年九月から、「パカフェ」は、お父さんもちよつとぎつくばらんに、お酒もあるし奥さんに言えなかったことをぶっちゃけてみませんかというところでスタートしました。大もとはNPOの「ビーンズふくしま」というところで、スタートはリースクールですね。不登校生徒の居場所づくりと若者支援といったリースクールが今も中心で、すごく私も今もお世話になってます。もう皆さん御存じだと思んですが、就職難もあるのですが、一旦就職して二年、

三年目で辞めて、もう一回社会に戻れないという若者が多いんですね。そういうユースプレイスっていうんですが、コミュニティをつくれない若者の支援ですね。あとは、学童的な、共働きでうちに帰っても誰もいなくて、子どもを預かって勉強を教えるとか、あと子どもの学習支援、仮設住宅や避難してきた子どもたちへの支援を今も続けています。

さっき言ったママカフェですが、今は子育て支援センターになっていて、今も「みんなの家」という名前で、福島県外に避難した、してない関係なく、支援センターとして機能しています。これはどちらかというと、今も避難中だったり、私のように戻ってきた人たちのコミュニティです。八月にまだ東京に避難している方と福島の方と交流会のイベントを企画して、それがここが主になっています。これは「みんなの家@ふくしま」の九月のイベントのカレンダーです。九月一七日は「べびままDay」といって赤ちゃんや小さい子どもがお母さんと子どもが来ていろいろな教室をやっています。今日も何かやってますね。時々、クッキーを焼いて売ったこともあります。

いろいろなイベントの中の一環として「F・ぱぱプロジェクト」というので、スタートしました。基本は福島で子育て中のお父さん同士でいろいろな話をしてみませんかということで、避難した、してない関係なくやっています。ほとんど飲み会ですね、勝手に持ってきたんですけど、この写真は、県庁職員、あと保育園の経営者、あと大阪の方もですね。この大阪の坊主の方はすごいノリがいいです。やっぱり大阪の方は、いつも場を盛り上げてくださるんです。そのようにさまざまです。

あと、この下の写真の立っている真ん中の方は、今も除染活動と、あと、本当に県内県外くまなく線量を量ってホームページにアップされています。ちょっと話が飛び飛びになってしまうのですが、今もやっぱり線量は高いです。当たり前なんですけど、福島市も高いところは高いし、幾ら除染しても、洗っても磨いても落ちません。同じ公園でも、遊具や地面のゴム素材のやわらかい歩道があつたりしますよね、赤だつたり緑だつたり。あそこはうんと高いです。とれないです。五倍、六倍くらい線量です。本当にもう気にすることのない線量なんですけど、一応この方は細かくアップされています。なので、やっぱりできるだけ小さい子は、長時間そこにわかつていれはさせないほうがいいです。本当に健康被害に全く影響がないと私も思っているのですが、やっぱり小さい子どもを持つお父さん、お母さんたちにとっては、ほかよりは一〇倍、ほかの地域よりは二〇倍高いんだということを、気にしなくていいよって言われても気にするのが感情だと思います。私は正しい情報をちゃんと自分で判断材料にして、ここはいっぱい遊ばせても大丈夫、ここものは食べさせても大丈夫っていうことをやっぱり自分で調べて選択していくっていうのが大事じゃないかなというふうに思います。今まで出会った方々、研究者や専門家の方や大学の先生にもいろいろな話を聞きましたけど、やっぱりそういう考え方でいくべきじゃないかなとも思っています。

これは去年の写真なんですけど、一応この三人の代表で行っています。多いときで二二、三人で、少ないときは本当に三人ぐらい。三、四人のときもあります。もちろん、毎回出場しているのは

私です。あとはスタッフということ。

初回、よく覚えてはいるんですが、一人一人、三月一日のことから話してくださいと話を振ったら、一人四〇分ずつしゃべったんですね。二〇一三年の九月ですね、この話をしたの。私もそうだったんですけど、三月一日のことを久しぶりにしゃべったという感想が出ました。今の私の状態もそうなんですけど、たまに当時のことを思い返して人に話すっていうことは大事だなんて思います。消えて記憶はなくならないそうです。薄れていて思い出しづらくはなるんですけども、シヨックなことや悲しい出来事の記憶はなくなるといふことはないそうですので、定期的に人に話を聞いてもらうっていうことがやっぱり大事じゃないかなと思います。このときは、京都に母子避難している方、あと佐賀県に避難している親子、お母さんと子どもだけ九州、京都、仙台、さまざまなお父さんたちで飲んだんですけど、やっぱり時間が足りなかったです。本当に二時間、三時間では語り尽くせなくて、これは妻にもしゃべったことないな、初めて人に話したなんていうことがあって、私も含めてですけど、良かったなというふうに覚えていきます。

ちよつと変わりました、さっきも言いましたけど、男って女性のようになかなか共有することはないんです。DNAがそうなんだと思うんですけど、外に出ると敵同士というか、外に出たら獲物をとってくるっていうんですか、やっぱり命がけで外に出て餌をとってくるっていうので、なかなか痛みを共有するとか、ママ友のような存在はできないんですね。なので、ただのおやじの酒飲みの会になってしまいうんです。本当にさっき言った、悩みを共有するっていうところはな

かなか男同士では難しく、バーベキューや飲み会をしたり、その中でこういうイベントを混ぜたりというのを、二年目、三年目ぐらいからしています。

このアームレスリング大会は本格的な台を持ってきていただいて、レフリーをやっている方は本物のレフリーで、日本チャンピオンの方も来ていただいたんですけど、これは、パパ同士の対戦で、ママ同士の対戦、子どもとの対戦というようにトーナメント制にしてメダルをプレゼントしました。あと、右側はまき割りです。私、斧を持っていてるんですけど、切りやすい大きさにカットした薪を子どもたちが割って、写ってないんですけど火おこしました。自分で火をおこしてつけた火で、割ったまきでバーベキューをするというものです。その下は、三月一四日のホワイトデーにママに感謝の気持ちを込めてチョコレートをつくりました。真ん中の方が、福島の猪苗代でカフェをやってらっしゃる有名な方で、すごくインスタ映えされるスイーツをいつもアツプされてて、私も毎日チェックしているんです。本当においしいチョコレートというか、本物のチョコレートをこのとき初めて食べました。それを作ってその場でママに渡すということをやってみました。これは結構好評で、限られた人数だけだったんですけど、去年もやりましたし、今年もやる予定です。

これは外に出て、東京のあきる野市というところ、ここは溪流釣りのメッカなんですけれども、ここでキャンプをして、東京にまだ避難中の方とここで合流して、一緒にキャンプや釣りや花火をしました。去年は台風の影響であきる野市まで行けなかったので、福島県の田村市で開催しま

した。今年は近場でやってみようと、東京の方にちょっと福島に来てもらおうということで、会津坂下町というところがあるのですが、そこでカメラをやったり、それからツリーイングといって木登りですね、自分の力とロープ一本で登っていくっていうのを、私を含め子どもたち、お母さん方もみんなでやりました。こういうことを通して、それでもなかなか核心部分の話をするというのは本当に時間がかかります。本当に福島に戻ってこられる気持ちはないんですとか、戻ってくる予定ですかとか、いろいろなことを知っているからこそ聞けないっていうのがあるので、私はもう積極的に聞くようにはしているんですが、もう子どもが中学生、高校生になっているので、東京の高校に進学しているっていうのもあって、ほとんどの方はもう帰らないと言っているんです。でも、気持ちはこうやって、定期的に福島に帰ってきたり、お墓参りに帰ってきたり、家の修繕に來たりっていうのを見ると、心はまだ福島にあるんだということがわかって、そういう話もできるだけ県内の人に、学校でも、ほかの先生方にも事あるごとに伝えるようにしています。震災はもう終わって見た目は元の福島に戻っていますが、線量も下がっているけど終わってはいないんだよということを言い続けていきたいと思っています。

この左上の写真が私の妻と、真ん中の黄色い坊主が私の息子です。小学校二年生です。隣はおい子です。隣は私の妹です。今は雑誌の編集長をやっています。雑誌を持つてくるのを忘れましたので、後から怒られると思います。枚方市にもあると思うんですけど、タウン誌というか、その編集長をやっていて、何でも興味があるので、こういうイベントとかにもいつも興味を持

って、忙しいんですけどつき合ってくれて、いろいろなとこに一緒に行ってくれます。右下の、これが今年の東京の避難中、もう帰らないって決断された方も多いですけど、その方々と、この坂下町でバーベキューをやっているところですよ。なかなか中学生、高校生になると難しいですよ。今どういう気持ちでいるかどうか、福島に対してどう考え、どう思うとかっていう質問もすごく言葉を選びながらでしたけれども。

一年育休をとって現場に戻ってきて、いろいろ大変なことはもちろんあったのですが、一番はやっぱり自分の机がある、自分の教室、自分のクラスがある、自分の部活の子どもがある、自分の仕事があるっていうことのありがたさ、感謝する気持ちをすごく改めて感じました。自分は、こんなにも恵まれていたんだなということはすごく痛感しました。親にも保護者にも生徒にも妻にも地域にも感謝する気持ちが全然違いました。

二番目のこれは、NHKで放送されたものです。このとき三年生の担任をしていたので、卒業を控えてということで、道徳の中で、作文を教材にしております。後ろの青いTシャツ着ている少年が、人権作文コンテストで、一位をとった作文なんです。この少年が、中学二年生だったと思うんですけど、この親子の会話を聞いて衝撃を受けてまとめた作文です。子どもが福島の桃を指さして「何で桃を買ってくれないの、桃食べたい」と言っています。お母さんが「だって、これ福島産だよ」と言う。やりとりはもつとあるのですけれど、この少年は後ろでそのやり取りを見ていたんですね。それを受けて、この子はお父さんお母さんも中国籍の中国人で、ただ日本生

まれ日本育ちなので、中国人だろ、おまえっていう言葉を投げかけられたことがあって、そういう経験も含めて、どうして差別するんだろうと、何が違うんだろうという人権作文が載っているんです。その年の文部科学大臣賞だったか総理大臣賞だったかの作品で、すごく私も胸を打たれた作文で、ぜひ使いたいなと思って、NHKの方にもこれで授業しますと言いました。ただ、テレビが入るっていうことは、普通の授業と違うので、すごく果樹農家が多い地域ですし、何て話しするんだと。おまえ、わかってんのかというお叱りもあるかもしれないと話をしたのですが、すごく優しい、穏やかな地域っていうこともあるのですが、お叱りや批判とか、そういったことはありませんでした。

最後は、そういう差別や偏見をなくす社会を作っていくにはというまとめになるんですが、私はこの中で、母親のこの思いはだめなのかと、子どものことを心配してやっているのだよね、これってだめなのか、差別なのかと、間違っているのかなということ投げかけたんです。実はこの母親の言葉は私の言葉でもあったと思うんですね。少なくとも二〇一一年、二〇一二年、二〇一三年に福島に戻ってきた後でも、やっぱり正直、福島県産の果物、野菜、水に抵抗があった自分がすごく重なったんですね。私も福島の間人でありながら、福島のことを差別していたのだなというふうになるのかなと、それってどうなのかと投げかけたんですね。そしたら、子どもたちも考え直したんですね、もう一回。道徳っていうのはすごく大事で、私も毎週道徳の授業を悩みながらやっているのですが、一方的な見方、考え方を子どもにも押しつけるのは絶対にやめ

ように思っています。これはこうでなければならぬ、こうであってほしい、もちろん願いはあるのですが、この出来事についてどう感じるか、質問を投げかけるのはいいんですけど、これはこうじゃないのっていうことをしなないようにしようと思っっています。そのように考えられるようになったのは、先ほど言ったように新潟の経験があったからです。なので、子どもたちから反応があつて、感想の中でもすごく葛藤が見られまして、道徳の授業でいろいろなことを子どもたちに考えさせるっていうのは大切なんだなって、教員の役割っていうのは本当に大きいんだなっていうふうに感じました。やっぱり手を抜かずに道徳の授業に向き合っていかなきゃいけないなというの、先生方とも共有していきたいと思ひます。

この写真は、上は桃なんですけど、下の作業はりんごの摘果作業といつて選別しているところですね。大きいだけ一個だけにした後、ちっちゃいのは取るっていう、今年の五月の作業の様子です。確かにまだ果樹園の線量は高いんです。もちろんもう五年前、六年前よりはかなり低いんですが、果樹は二〇年、三〇年もつ木ですので、全部切るわけにはいけませんし、木一本一本を除草するわけにはいかなかったので、普通の線量の値ではないです。本当に農家の方は、私がおんな話をして申し訳ないぐらい大変だつたと思ひます。今も払拭されてないんです。風評被害はまだもちろんあるのですが、桃は本当においしいです。ぜひ来年はお取り寄せをよろしくお願ひします。七月からいろいろな種類が出回りますので、これはあかつきという品種で、実が赤いんです。中もちよつと真つ白じゃなくて赤みが多いんですけど、白桃とまた違う風味があつて、

ぜひ。福島の間人は固い桃が好きなんですよ。どういうわけか、私もなんですけど熟した柔らかいとろつとした桃じゃなくて、固いのが好きなんですけど。三日置けば柔らかくなりますので、ぜひ。

今、線量が高いとか、何かちょっと暗いイメージの話をしたのですが、これ、今年開催されたイベントで、同じ桃畑です。何だこんなおしゃれなことやってんじゃないのって、風評被害なんであるのっていうぐらい、こういうイベントもやっています。私は行けなかったんですけど、すごく前向きに発信していますので、すごくほっとしたのですけれども、こういったこともやっています。

道徳に戻りますが、さっきの「それでも僕は桃を買う」っていうのは、一番左下の第Ⅲ集っていう福島県では道徳の教材の「郷土愛・ふくしまの未来へ」っていうものの中の一節だったんですが、小学校版、中学校版、高校版っていうふうに分かれていて、福島にちなんだ、震災関連ばかりじゃなく、いろいろのが出ています。今年の一年生にもさっきのこの授業は行いました。中学三年生と一年生では感覚が違うので、何これって、昔の話じゃないのっていう面もあったんですが、やっぱりいろいろ考えてくれました。

ちょっと今の学校の現状なんですけど、私も教育委員会ではないのですが、先ほど言った避難地域は皆さん御存じだと思いますが、左側の、東側の福島第一原子力発電所の周辺の浪江町、上からですね、南相馬小学区、ここはもう解除になっていますが、浪江町、双葉町、大熊町、富岡町、

楢葉町。黄色のところが帰還できる場所になっています。もちろんもう立ち入ることも制限されているところもあれば、時間制限で入れる場所もあれば、一泊、二泊だけだったらできるとか、もう本当に細々です。この辺りの方々、新潟に避難してきた方々とかかわりを持ったということですから。再開している学校もあれば、まだスタートしていない学校もあるというのが現状です。

これは福島県全体の不登校児童生徒数の推移です。何でこれを持ってきたかというところ、不登校児童が増えているのです、福島県で、特に福島市が。震災と関連があるのかというのをすごく私も気にしているんですが、阪神・淡路大震災の後、間違っていたら本当に申し訳ないのですが、震災直後は不登校が減っているんですね。数年後にやっぱり増えてきて、たしか七年後か八年後ぐらいに不登校児童がすごく増加していったというデータを見たんです。今、福島県もそうなのかなっていう危惧というか、新潟にいたときも二〇〇四年、二〇〇七年の中越沖地震から五年目、何年目というときで、やっぱり不登校が増加傾向、もしくはいじめの問題もちょっとずつ増加傾向にあったのを覚えていて、大きな震災から五年、一〇年が危ないのではないかなと研究している方もいらっしゃると思うんですが、私も勉強不足で、ちょっと調べたいと思っています。ですので、ちょっと歯どめがきかない状態です。理由も、いじめや人間関係を苦にしているというはつきりしたのではなく、家庭環境ももちろんあるのですけれど、原因がわからない不登校も増えています。お父さんお母さんもしっかりしている、いじめもない、友達もいる、勉強もそこそこ、何が原因なのかっていう、前はなかったパターンがどの学校でも出てきているのが気がか

りです。震災と、もしかすると直接ではないですが、新潟で親に、先生に本音を言っただけでこなかった、言えてこなかった、もしくは震災の意味がわかり始めた子たち、福島県に生まれたという、自分たちがどのような立場に置かれているかとか、そういうのに気づき始めた影響とか、考え過ぎかもしれないのですけれども、私はどうしてもそういう経験をしてくれているので、少し関連づけてしまおうんです。そういう不安もあるのが今日このごろです。

それから、不登校傾向の児童生徒の状況は、やっぱり中学生が多いんですが、中一ギャップと言われているのですけれども、小学校と中学校の連携を密にしていって、いっていいところをものすごく今、力を入れています。私の学校も、現在そうです。

これはまたちょっと違うのですが、今も避難中の子どもたち、約一万人いるのですが、先ほど言ったようにもう今の中学一年生が四、五歳です。揺れが大きかった、怖かったっていうのは覚えていられるのですけれども、原子力発電所の仕組みも知りませんし、発電の仕組みもわかりません。なので、原発事故とは何なのか、放射能とは何なのか、これから教えていく世代なんですけれども、本当に福島県がやっていかなきゃいけないことは、これからますます大きいかないと思っています。

これは、今度は不登校ではなく特別支援ですね。新潟にいるときも、もちろん特別支援の子どもたちにも何人も会いました。特別支援的、いわゆる普通学級にしながら、本当は特別支援だろうという子も非常に多いです。新潟も多かったのですが、福島も同じで、不登校と、この特別支

援的な普通学級にいる、配慮を必要とする子どもの数の割合も非常に問題になっています。この二つ、不登校の問題と特別な支援が必要な子どもが、これが今現在の私の目の前にある大きな課題になっています。

これは、マイナスの面ばかりではなく、震災後、身の回りで起こっている出来事などに関心を持ち、人が困っているときは進んで手を差し伸べるなど、人のためになりたいと思っっている子どもが増加したと。これは全県的な傾向、全国の、ほかの県との比較はちょっと見てこなかったんですけど、福島県だけで見るとちょっと上がっていて、すごくこれはうれしいなと思っっています。若い先生方も志を持って福島に戻ってきて教員をやっている方がたくさんいます。大学は県外なのに、何であえて福島県の教員に戻ってきたのって。いや、戻ってきてもらってうれしいんですけど、そういう若い先生が多くて、すごく頼もしいなというのはあるのですが、今現在勤めている学校の隣の、まだ若い三〇代前半の先生も、最初は神奈川県で採用されて、戻ってきたんですね。やっぱり神奈川県から戻るときに、何で福島に戻ると、ここにいたほうがいいじゃないって、安全なんじゃないのって言われたそうです。もちろん良かれと思って言っているのですけど。

あと、自分には良いところがあると考えている児童生徒も、数字が上がっているっていうのがありました。

まだ、ちょっと話し足りないところもあるのですが、すみません、ぼちぼち飛んで申し訳あり

ませんでした。ご清聴ありがとうございました。

(拍手)

○司会 武田秀司さん、ご講演ありがとうございました。

本日はもう少しだけ時間がございますので、皆様からのご質問をお受けしたいと思います。質問のある方は挙手をお願いします。どなたか質問のある方はいらっしゃいますか。

○質問者A ご講演ありがとうございます。福島のお聞きしたくて今日は来させてもらったので、子どもたちの様子も伝えていただいて、ありがとうございます。学校で奮闘されている様子が伝わってきました。

六月か八月ごろでしたか、福島市内のモニタリングポストを撤去するという動きがあったときに、若いお母さんたちが反対の声を上げて、撤去されなかったというふうに聞きました。先ほどのお話でも、なかなか声を出せないんだっていうことでしたけれども、若いママたちが子どもたちのために声を上げたのかなっていうふうに感じたのですけれども、そのあたりのことと、あと、震災後に生まれた子どもたちの健康を心配して、保養に出かけているママたちがあることと聞きましたので、そのあたりの様子がわかったら少しでもお話ししていただけたらと思います。

○武田秀司 モニタリングポストは、本当は撤去が決まっていたのですけれども、学校の前にもありますし、公園のところにもまだ設置され続けています。私は、あれがかえって福島の風評被害を、まだ何か長期化させているんじゃないかという意見もすぐわかります。ただ、本当に

先ほど言われたように、若いお母さん、小さい子どもは、受ける影響は大人の何倍もだと思うのですよね。やっぱりその科学的な分析と心、感情って違うと思うのですよね。その心の、科学的ではないかもしれないですが、そこを大事にするっていうのは、私はそれでいいなとすごく思いました。撤去の中止は当然だなとすごく思いました。ただ、ご覧になったことありますか、形、あのデザインというか、しようがないと思うんですけど、あれがもつと何とかならないのかなというのには個人的にはあります。

あと、保養なんですけど、先ほど私も福島に戻ってきた一年目は本当に敏感になっていて、わざわざ米沢まで連れて行って行ったので、今もそうしているお母さん方に対して、もう大丈夫だよ、そんなことしなくていいよということには全然思いません。ただ、子どもの健康面だけじゃなくて、自分たちも楽しむための旅行とかでいいと思います。むしろ子ども中心で考えて避難したり、保養に行くのですけれど、家族全員が楽しむ。先ほどのいろいろなイベントをやっているのはそういう趣旨なんです。だから、子どもたちのためにこう、悲壮感が漂わないようにというか、そういうのがあって、そこをやったり、今も支援されている団体の方たちはそのように心がけていて、明るく陽気に前向きに、なかなかこんなこと言えないのですが、こんなことがあったから福島が良くなった、震災の、原発事故のおかげで良くなったって、まだ言えていないと思うのですけど、そう言えるっていうのが共通の目標なんだと思います。

なので、福島で子育てしたい、してもいいなって、ふるさとに戻って子どもを産んでもいいな、

福島で就職しても、Uターンしてもいいなと思って思えるようにするには、やっぱり我々福島の人間が頑張らないといけないんだと思います。その一つとして県外に、不安だから長期休みは県外に行っている人がいるんだっていう、そこだけ取り上げられないように、取り上げないようにっていうのは配慮というか、必要なと思います。

○司会 ありがとうございます。ほかに何かご質問のある方はいらっしゃいますか。

○質問者B 無知で恐縮なんですけど、今の話に出てきたモニタリングポストって何ですか。

○武田秀司 ありがとうございます。線量計が電光掲示板みたいに表示されるものです。大きさは本当に赤いポストの高さぐらいのヘンテコな形です。何か見せられれば一番いいんですけど、数字はこのぐらいのこう、赤い電光掲示板みたいに。

○司会 そのホワイトボードに書き込んでいただけますか。

○武田秀司 できます。絵心はないですけど。そうですね、じゃ、ご覧になったことない方いらっしゃいますか。ああ、ちょっと待ってください。これは見せたほうがいいですね。

こういうものです。太陽光パネルで、ここに表示が、ここに線量計がある。今はほとんど〇・一幾らのレベルです。これ、〇・一四とかですね。このあたりでも〇・一ぐらいです。変わらななんです。正確に量ると、感度がいいので量ると〇・〇七とかだと思うんですけど。三年前ぐらいだとまだ〇・三とか、雨の日とか風が強い日は〇・四とか高かったんですけど、今はほとんどこのぐらいです。今、〇・一四ぐらいですか。今は、私の学校についても最近もう全く見なくな

つたので、気にもしなくなっただんですけど、〇・一台です。三年前は〇・三幾つぐらいでした。さつき、今も線量をいろいろな場所で量っている方がいらっしやるって言ったんですが、これが高いところは〇・九とか一コンマ幾つ、同じ場所でも、下の道路の素材とか、コンクリートだったり、ゴムの素材だったり、要は放射線物質が取りにくい、完全に取りにくい素材の壁や床は高いんですね。それはこのポストに出ないんですよ。

ここに機械があるのでですけど、ここですね。この高さ、つまり小さい子どもの高さに合わせているんですね、一メートルとか八〇センチとか。大人は、数値がもつと低いはずなんです。この値なんですけれど、もちろんいろいろな勉強会や放射線科の専門家の先生の講演や勉強会にたくさん出たんですけど、わからないんです。頭が悪いので理解できないんですけど、一番わかりやすかった例えが、「しょうゆを毎日食べるね、武田さん。刺身につけてしょうゆ食べるよな。毎日、しょっちゅう。でも、しょうゆを二リットル一気に飲んだら死ぬんだぞ。飲まないけど、飲んだら死ぬんだよ、致死量なんだよ。毎日食っているだろう」って。ということは安全ってことですかと聞くと、安全といえは言えると言われました。何かすごい乱暴な説明だなと思いがちでも、でも、専門家の話を聞いても、私にはよくわからなかったです。

新潟でもたくさん本を読みましたが、どこまで気にしてどこまでどうすればいいんだっていうのは、そういうことで、ただ、さつき言ったように全然気にする値ではないです。さつきの果樹園、桃は高いです、ちよつと、もう少し。でも、桃に影響が出る高さではないし、そんな二時

間ぐらい、三時間ぐらいの作業をしても、桃狩りをしたところで何の影響もないのですけれども。お母さん方からすれば、前より低いねっていうのもそうですし、だんだんやっぱり低くなっているのですよ。確かに、去年よりも、一昨年よりも、四年前よりも。ただ、やっぱりお母さんは安心するのだと思う、ここの公園は大丈夫だよ、年に何回か除染しているし、この値だから遊ばせて大丈夫というふうにしてきたので。小さいお子さんを持つ若いお母さんも、こんなの要らないよとは思わないんだと思うんです。すごくわかります、気持ち。私も、これが上がったらすごく「ええ？何で今日〇・三なの」って多分思うと思います。なので、異様に見えるかもしれないですけど、私はやっぱり福島の人間にとっては、まだ必要かなと思っております。

○司会 ほかに何か質問のある方はいらっしゃいますか。

○質問者C ありがとうございます。

二つお尋ねします。一つは、新潟へ二年間行かれたと、福島から避難したと、小学二年の女の子の話をされて、ああ、そうかという、胸を打ったんですけれども、今日インターネットを見ていたら、先生自身が新潟に行かれたときに心ない差別発言を受けたということを書いておられました。これを読んだので、そのときの体験を聞きたいのと、もう一つは、レジュメの中で、いじめや偏見の問題など、話題になることは少なくなりました。しかし、福島の子どもたちの戦いはこれからだと思えますという部分をもう少し語ってほしいなというところで。

○武田秀司 ありがとうございます。

NHKのニュースのときは、新潟の、休日にドライブをして山にちよつと行ったんですね。したら、片側通行で警備員が止めていて、無線でナンバーを向こうに伝えますよね。一々何々通過って、そのナンバーの車が行ったらすち通していいよっていう、ありますよね。そのときに、放射能通過って言ったんですね。私も、窓あけてたので、本当に降りて、今、何て言ったって言いに行きそうだったので、子どももいたし、妻にも言わなかったのですけど、後から何で降りて怒鳴らなかつたのって言われましたけど。そのことだけではないんですけど、そこが放映されたってことです。

私としては、もっといっぱいあったんですけど、一番は広報紙でした。私、広報紙を見るのが好きで、いろいろな広報紙見ると、行政がわかるので、行ってすぐ刈羽村の村政だよりを見たんです。福島ナンバーの車が洗車に来ているガソリンスタンドの場所を教えてくださいって書いてあったんですよ。村政だよりの投稿欄みたいなのに、村民の声っていうところに。福島ナンバーがよく洗車に来ているガソリンスタンドの場所を知りたいのですなんて、いや、これ載せちゃうんだと思って、広報紙に。いや、別に刈羽村の悪口言っているわけじゃないんですけど。新潟の方にとってはやっぱりすごい切実だったと思うんです。あのときやっぱり放射線の飛び方も、南東から北西のほうに拡散しましたから。あと、川も福島経由で日本海側に流れているので、すごく恐怖だったと思います、福島のが、汚染物質が。そのときはもう怒りでしかなかったし、ああ、ここに住めるのになって、福島ナンバーで通勤、車で、大丈夫かなって不安にもすごく

駆られましたね。まず、行つてすぐだったので、でもそういう現状なんだなつていうのはわかりました。

あとは、結構、駐車場がいっぱいなのに私の両脇には車が停まっていなくて、気がし過ぎかもしれない、たまたまかもしれないんですけど。たまたま、たまたま出てつただけのところに戻つてきただけだったかもしれないんですけど、何回かありました。

なので、私も新潟に行つて、女の先生、特に独身、それもおかしいんですけど、独身の先生つていうのもおかしいですね、だめですね、差別ですね。女性を乗せなかつたですね。何か一緒に相乗りして、歓迎会とかに行くときに、武田先生の車でいいですかつて言われて、いや、ちよつと何か車が汚いから違う先生のほうがいいよつて言う自分、何かそんな自分でしたね。福島からお土産を買つて、一旦ちよつと戻つて新潟にまた戻つてくるときに、福島のお土産あげて、複雑な気持ちにさせるだけかなとか、目の前で一生懸命食べるけどあれかなとか、梨とかリンゴとか桃はやめたほうがいいんだらうとか、いっぱいあると思うんです。気にし過ぎているところはあつて、過敏だつたと思うんです、とにかく。だから、もうしよつちゆうバックミラーや、きよろきよろして運転していたのを覚えています。最初の半年ぐらいですね。何げない言葉だつたので覚えてたので、そのときにこう話をしたので、そこを取り上げられてしまつて何かすごくクローブアップされたんですけど。

あと、今ここにいらしている皆さんは何かすごく、私の偏見かもしれないんですけど、何か今、

大阪に来ている感じがしないんです。「兄ちゃん、もつとはつきりせんかいとか、聞こえないよ」とかって言われるのかなと思っちゃってちょっと期待してきたんですけど。何かすごく品のいい、何ていうんですかね、福島の人は自己主張が下手なんです。自己主張ができないんですよ。うれしいんだか悲しいんだか楽しいんだか、おもしろいんだかまずいんだかをはつきり言わないんです。本当なんですよ。福島県民全員じゃないんですけど、特に中通りって言われる福島市、郡山市、白河市は、遠慮深いというか、良くも悪くもまずちょっと人と距離を持つとするとするんですね。一気に入ってこない感じはあります。

なので、子どもたちも同じなんです。だから、何ていうんですかね。無防備に打たれるっていうか、いじめられたり、嫌み言われていることにも気づかないというか。それは気づいて傷つくほうがいいのじゃないかと、ばか過ぎて、無知過ぎて、ばかにされたり、今、偏見、ちよつと差別的なこと言われたのだよって、わからなかったのっていうところあるのです。寝た子を起こすようなことをしないでくださいっていう考え方もあるのですけど。そうじゃなくて、この二〇一一年三月、福島県で生活していました、福島県出身です、福島で生まれました、福島で娘を産みました。いろいろなこと知ってて、福島の歴史も原発事故のことも、今日私がしゃべったようなこともある程度理解していて、それをちゃんと堂々と福島から来ましたって言えるようになるには、まだ頑張らないと、我々大人は頑張らないとだめだなんていう感覚です。これからだっていうのは、そういうことです。

これから多分成人して、県外に就職したり、進学して結婚ってなったときに、ところであんた、今度結婚する女性だけど、福島の子なんだって、大丈夫なのって言われると思うんですよ。いや、息子が心配だからですよ。そんなの今から心配してどうすんのって声もありますけど、でも、私は口に出して言うべきだと思うんですね。不安だったら不安だ、悲しい、つらい、嫌だって、それをやつぱりもつと声に出せる福島の子どもたちじゃないと。とてもじゃないですけど、本当に引きこもつたり、もう隠したり、逃げたりっていうふうには、不登校が、すごく危惧しているのはそこなんです。不登校って結局逃げですよ。立ち向かってない子もいますよ。それだけじゃない、逃げ道も必要なんですけれども。だから、いろいろ考え方はあるんですけど、やつぱり差別、偏見の問題は根が深いと思いますし、ほかの社会で起きている差別や大きな問題にしろ、いろいろな障害者やジェンダーフリーとかも、全部声に出して伝えようってしないとやつぱり解決しないし、変わっていかないんじゃないかなと思うので、ちょっと話はそれましたけど、そういうところで私も闘っていききたいなと思います。多分この姿勢で続けていくと思うんですけど、すみません、ありがとうございます。

○司会　ありがとうございます。

それでは、これで質問は終わらせていただきます。

皆様、もう一度、ご講演いただきました武田秀司さんに大きな拍手をお願いします。

(拍手)

ありがとうございます。それでは、これで本日の講演を終わらせていただきます。本日はどうもありがとうございます。

